2024年度　第23期　水俣学講義　第9回　2024.11.21

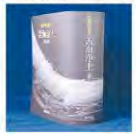
石牟礼道子さんとの日々

熊本日日新聞社文化部

浪床敬子

作家石牟礼道子（１９２７～２０１８）

石牟礼道子さんの足跡と水俣病事件史（敬称略）

1927年	天草郡宮野河内村（現天草市）に生まれる。父は白石亀太郎、母ハルノ。3カ月で芦北郡水俣町に移住	
32年		チッソ水俣工場でアセトアルデヒドの生産開始
35年	祖父松太郎が事業に失敗し、自宅を差し押さえられる	水俣市のチッソ付属病院で子どもを診察＝1956年
43年	水俣町立実務学校卒業。芦北郡佐敷町の代用教員養成所に入学	
47年	教員を辞め、石牟礼弘と結婚。翌年、長男道生が誕生	
52年	歌誌「南風」に入会	
56年		水俣病の公式確認
58年	水俣出身の詩人谷川雁の「サークル村」結成に参加	チッソが工場排水の排出先を百間港から水俣川河口に変更し、汚染が拡大
59年		チッソと患者側が見舞金契約
62年	同人誌「詩と真実」に入会、熊本新文化集団に加わる	チッソ水俣工場で「安賃闘争」
63年	水俣市日当猿郷に引っ越す。雑誌「現代の記録」創刊	熊本大研究班が「原因物質はメチル水銀化合物」と発表
65年	「熊本風土記」に「苦海浄土」の初稿を連載開始	新潟水俣病の発生が公表される
68年	水俣病対策市民会議（後の水俣病市民会議）を結成	アセトアルデヒドの製造終了。政府が水俣病を公害認定
69年	「苦海浄土―わが水俣病」出版。熊日文学賞に選ばれるも受賞を辞退	水俣病を告発する会が発足。患者らは水俣病１次訴訟を提起
70年	「苦海浄土」で第１回大宅壮一賞に選ばれるも受賞を辞退	患者らが一株株主としてチッソの株主総会に加わる
72年	自主交渉のため東京と水俣を往復。編著「水俣病闘争―わが死民」を出版	
73年	熊本市に仕事場を設ける。マグサイサイ賞受賞。季刊誌「暗河」を創刊	水俣病１次訴訟で患者側勝訴。チッソと患者側が補償協定を締結
74年	「苦海浄土」第３部とされる「天の魚」を出版	水俣病１次訴訟判決後の熊本地裁前＝1973年3月20日
76年	「椿の海の記」を出版	
78年	熊本市若葉、熊本市健軍と仕事場を移す	
84年	「おえん遊行」を出版	
89年	歌集「海と空のあいだに」を出版	
95年		未認定患者を救済する政府解決策を閣議決定
97年	「天湖」、「水はみどろの宮」を出版	10年かけて刊行された「石牟礼道子全集」の全17巻
99年	「アニマの島」（「春の城」から改題）を出版	
2003年	「はにかみの国　石牟礼道子全詩集」で芸術選奨文部科学大臣賞受賞	
04年	藤原書店から「石牟礼道子全集・不知火」の刊行を開始。新作能「不知火」水俣奉納上演。県近代文化功労者	水俣病関西訴訟で最高裁判決。国の認定基準より幅広い被害と国と県の賠償責任を認める
06年	熊日賞受賞	水俣病の公式確認から50年。未認定患者を救済する「第２の政治決着」に向け与党プロジェクトチームが始動
08年	多田富雄との往復書簡「言魂」を出版	
09年		未認定患者救済とチッソ分社化を柱にした水俣病特別措置法が成立
11年	池澤夏樹個人編集の「世界文学全集」に「苦海浄土」３部作を収録	特措法に基づくチッソ分社化でできた事業会社ＪＮＣが営業開始
12年	「最後の人　詩人高群逸枝」刊行。天草四郎がテーマの戯曲「草の碧」「神宮」を発表	
13年	「水俣・福岡展」で講演。鶴見和子をしのぶ山百合忌で皇后陛下と初めて面会。「苦海浄土」を執筆した水俣市猿郷の旧宅が解体される	２件の認定義務付け訴訟で最高裁判決。感覚障害だけでも水俣病と認める
14年	熊本市の介護付き有料老人ホームに転居。自伝「葭の渚」刊行。詩集「祖さまの草の色」で現代詩花椿賞受賞	 「苦海浄土　全三部」（藤原書店）
15年	藤原書店から「石牟礼道子全句集　泣きなが原」刊行。池澤夏樹個人編集の「日本文学全集」第24巻が「椿の海の記」など15作を収録。夫弘が死去	
18年	2月10日、90歳で死去	

「苦海浄土」

渡辺京二さんが１９６５年に創刊した雑誌「熊本風土記」に「海と空のあいだに」で連載スタート。

１９６９年１月に講談社から「苦海浄土」として刊行。後に発表された「天の魚」、「神々の村」と合わせて３部作で構成される。

著作

苦海浄土
わが水俣病
石牟礼道子
この恐るべき現実!
西南役伝説
石牟礼道子
椿の海の記
石牟礼道子
あやとりの記
石牟礼道子 著
天湖
石牟礼道子
アニマの鳥
石牟礼道子

流民の都
石牟礼道子
流民の都
十六夜橋
石牟礼道子
紫式部文学賞受賞!!
石牟礼道子
おえん遊行
水俣病闘争
わが死民
石牟礼道子編
埋められた者のうめき

出会い

きっかけは２０１１年３月１１日の東日本大震災の被災地に石牟礼さんが送った詩経「花を奉る」の取材

「多くの人がこの世に心を残して亡くなっていった。彼らがこの世に生きていたことや彼らの思いを思い出してあげることで、彼らは私たちの心の中に帰ってくることができる。花をささげるという無償の行為が、その手掛かりになる。あの世に行っても、花を介して縁をつなぎ直すことができる。大震災で亡くなった人や被災者、すべての魂に花をささげたい」

「原発周辺など一番支援が必要なところが、最後まで取り残されている。最前線でも、下請けの作業員たちが命懸けで対応に当たり、被ばくを覚悟して家畜の世話をしている住民もいる。末端の人が犠牲になる構図は、水俣病と変わっていない」

「一輪の花の力念じて」

作家・石牟礼道子さん　震災被災者へ詩経

東日本大震災を目の当たりにして、十数人の詩人らが「信じる言葉」を朗読するイベントが４月下旬、東京の日本近代文学館で開かれた。水俣病と向き合ってきた作家石牟礼道子さん（熊本市）も映像出演。大震災で亡くなった人たちやすべてを失った人たちに「花を奉る」と題した祈りの言葉をささげた。

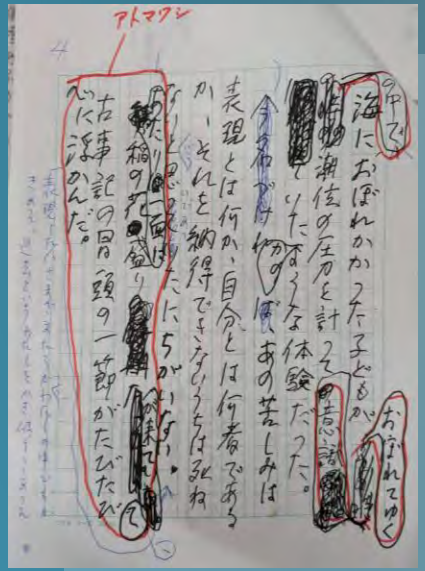
詩経「花を奉る」の原稿を手にする石牟礼道子さん＝熊本市

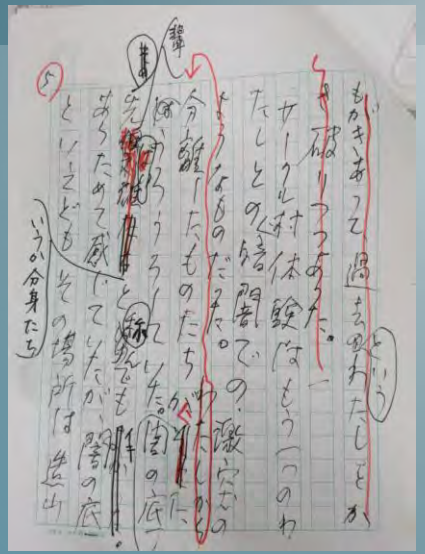
絶望くぐり抜け紡ぐ祈りの言葉

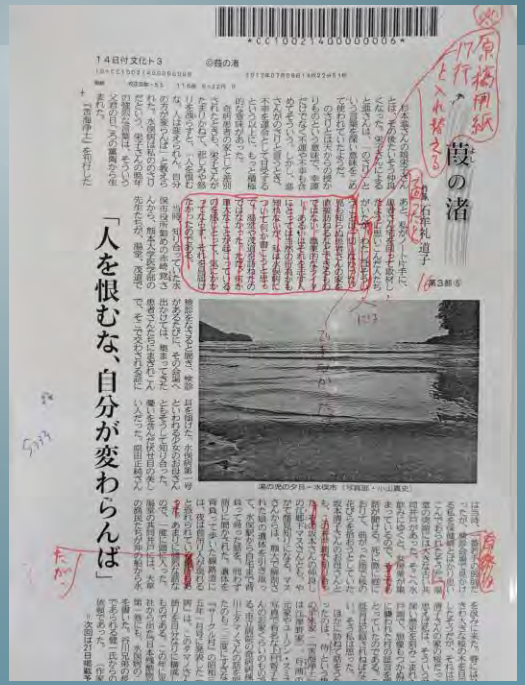
津波で幹が途中から折れた桜の木に咲いた１輪の花＝宮城県女川町

（熊本日日新聞２０１１年５月１６日付）

自伝「葭の渚」を担当





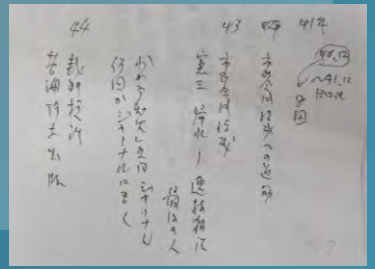


14日付文化ト3

葭の渚

石牟礼道子

「人を恨むな、自分が変わらんば」



熊日の「わたしを語る」シリーズとして、２００８年１１月から１３年５月まで１６１回にわたって連載した「葭の渚」に加筆。幼少期から戦後の結婚、子育てを経て代表作「苦海浄土」を書き上げるまでの半生をつづっている。

代表作「苦海浄土」を書き始めた旧宅

水俣川河口近くの「猿郷」という集落にあり、昭和３８（１９６３）年から熊本市に移るまでの１０年ほど、夫の弘さん、長男の道生さんと３人で暮らした家。

解体が決まり、旧宅を訪問

- 隣接する母屋に住んでいた両親が鶏小屋や納屋として使っていた建物を、父亀太郎さんが増改築し、木造一部二階建ての住居にこしらえた。
- 「父が水害の後に近くの水俣川に行き、流れてきた流木や建具などを拾ってきて、全部一人で建ててくれました。父は大工仕事も上手でしたから。水害の被害に遭った方には申し訳なかったんですけど」
- 〈百姓屋の納屋の屋根裏といえば、稲を脱穀したあとの藁やさつま芋などを、ごろごろ積み上げておく天井裏である。下の階もやっぱり物置きで、農機具や莚や漬物桶などを置く。そこへ親子三人が住もうというので、赤土の仕切り壁をつくり、モノたちや芋や藁を納屋半分に積み上げて、畳を敷いたような案配だった〉（『蝉和郎』より）
- 〈納屋住まいというのは、ふつうのちゃんとした住まいよりは、型やぶりに暮らせて面白かった〉（『蝉和郎』より）
- ※老朽化により、２０１３年１１月に解体

「むろん、それは書斎などであるはずがなかった。畳一枚を縦に半分に切ったくらいの広さの、板敷きの出っぱりで、貧弱な書棚が窓からの光りをほとんどさえぎっていた。それは、いってみれば、年端も行かぬ文章好きの少女が、家の中の使われていない片端を、家人から許されて自分のささやかな城にしたてて心慰めている、とでもいうような風情だった。座れば体ははみだすにちがいなく、採光の悪さは確実に眼をそこなうにちがいない。しかし、家の立場からみれば、それは、許しうる、最大限の譲歩ででもあったろう」（「もうひとつのこの世」（渡辺京二）

「苦海浄土」１９６５年連載開始、１９６９年１月刊行
「神々の村」（第２部）１９７０～１９８９年連載　２００４年全集刊行に際し、最終章を書き上げる。実に三十数年　訴訟の運動が一番注目を浴びた磁器
「天の魚」（第３部）１９７２年に執筆を開始、１９７４年刊行

「書かずにはおられんだった」

「苦海浄土」を書き始めたのは１９６５（昭和４０）年。渡辺京二さんが創刊した「熊本風土記」に、「海と空のあいだに」というタイトルで連載を始めている。

女性が新聞や本を読むことさえはばかられる時代。チッソの城下町にあって、当時は一主婦でもあった石牟礼さんはなぜ計り知れない苦悩と孤独を背負って書き始めたのか。

「昼に農作業や家事に精を出し、夜に家族が寝静まってから書いていました。昼と夜の顔を使い分ける癖がついていまして、世間様によか主婦、よか人間と思われたかったんでしょうね。物を書くのは割ることじゃありませんでしたが、やっぱり肩身が狭かった」

「細川博士の苦悩と心労はどのようなものであったか。無口な先生は、みずからは語られない。（略）水俣病事件を通じて、この事件の、あまりの残虐さに、私は人間というものや、うまくそのことが書けない自分に絶望し、虚無の深淵に沈むときがある。ほんとうに、息絶え絶えの状態になってしまうのである。そのようなとき、必ず、私は、細川先生の御気力を思い出す。くじけては、先生に申しわけない。先生のあの目の光に対して申し訳ない。そして私は、なんとか、蘇生する」（エッセー『細川博士にはげまされて』より）

「やっぱり……窓の灯りですね。書いていた時の。暗いばかりじゃなくて、充実感がありました」

解体の日、旧宅の庭で壊れていく家を見ながら、「父の手の跡が無くなったなあ」とつぶやいた石牟礼さんの淋しげな表情が今も忘れられない。

水俣病闘争

連載「なぎさの向こうに　闘争は問う」（全１６回）

厚生省（当時）は1968年9月、水俣病をチッソの工場排水による「公害」と認定した。しかし、チッソは59年の見舞金契約に続いて対応を第三者機関に委ね、極端に低い額で患者を抑え込もうとする。それを拒んで訴訟に立ち上がった患者たちを支援しようと、69年4月に熊本で結成されたのが「水俣病を告発する会」だ。公害反対運動の枠組みではくくれない異彩を放った運動で世論を大きく動かしていった「告発する会」を中心に、水俣病闘争の意味を問う。

「水俣」の命は安いのか

なぎさの向こうに　闘争は問う　①

騒動の理由

1970年５月25日に厚生省前で抗議活動をする「水俣病を告発する会」の会員ら。一番前で患者の写真を掲げ、仁王立ちしているのが石牟礼道子さん（写真家・宮本成美さん撮影）

水俣病闘争に絡む主な流れ

1956年	5月1日 水俣病公式確認
1959年	12月30日 見舞金契約（死亡30万円、生存患者年金10万円、子ども3万円など）
1968年	1月12日 水俣病（対策）市民会議結成
1969年	4月 患者・家族がチッソに損害賠償を求める裁判を起こすことを決意　熊本で「水俣病を告発する会」発足
	6月14日 水俣病1次訴訟提訴
	6月25日 機関誌「告発」創刊
1970年	5月25日 補償処理委員会阻止で厚生省で抗議活動
	11月28日 一株運動
1971年	11月 自主交渉派がチッソ水俣工場前で座り込み
	12月6日 自主交渉派がチッソ東京本社前で座り込み開始（～73年7月）
1973年	1月20日 2次訴訟提訴
	3月20日 1次訴訟判決（原因企業の責任を断罪）
	7月9日 補償協定調印
	8月25日 機関誌「告発」終刊

水俣病60年　第7部　2017.5.25

なぎさの向こうに　闘争は問う　②

チッソ前 抗議の座り込み

色あせぬ覚悟のビラ

1969年４月のチッソ水俣工場座り込みの際に配られたビラ

水俣病60年　第7部　2017.5.26

なぎさの向こうに　闘争は問う　⑯

「他人ごと」につきあう

幻の先

デモ行進する「水俣病を告発する会」の会員ら＝1972年、熊本市

水俣病60年　第7部　2017.6.11

熊本日日新聞（２０１７年５月～６月）水俣病公式確認６０年企画

水俣病を告発する会

水俣病闘争に絡む主な流れ

1956年	
5月1日	水俣病公式確認
1959年	
12月30日	見舞金契約(死亡30万円、生存患者年金10万円、子ども3万円など)
1968年	
1月12日	水俣病(対策)市民会議結成
1969年	
4月	患者・家族がチッソに損害賠償を求める裁判を起こすことを決意
	熊本で「水俣病を告発する会」発足
6月14日	水俣病1次訴訟提訴
6月25日	機関誌「告発」創刊
1970年	
5月25日	補償処理委員会阻止で厚生省で抗議活動
11月28日	一株運動
1971年	
11月	自主交渉派がチッソ水俣工場前で座り込み
12月6日	自主交渉派がチッソ東京本社前で座り込み開始(～73年7月)
1973年	
1月20日	2次訴訟提訴
3月20日	1次訴訟判決(原因企業の責任を断罪)
7月9日	補償協定調印
8月25日	機関誌「告発」終刊

「これは政府・司法機関が口を出す領域ではない。被害者である水俣病漁民自身が、チッソ資本とあいたいで堂々ととりたてるべき貸し金である。たとえ実効をもとうがもつまいが、独力で最後の交渉に入った患者・家族を支援し、その志を黙殺するチッソ資本に抗議することは、一生活大衆としてのわれわれの当然の心情であるとともに、自立的な思想行動者としての責任であると信じる」（１９６９年４月１７日、水俣工場前の座り込みに際したビラ　渡辺京二）

・規則も会員名簿も無く、政党など既成組織の論理を一切排除し、入会や退会、その時々の参加も個人の自由意思に委ねる。

・運動方針「患者がやりたいことを実現するために、個々人が必要なことを自分の責任において全力でやる」

「弁護士は私怨を捨てて裁判に臨めと言ったが、われわれはあくまで仇討ちとしてこの裁判を捉える。われわれの態度は義によって助太刀致すというところにある」
（水俣病を告発する会代表　本田啓吉）

（石牟礼道子、エッセーにて）

・本田さんの「義」という言葉について、「私たちが戦後生きる上で忘れてはならないものであった」

・「手に盾ひとつもたぬものたち、剣ひとつ持たぬものたち、権力を持たぬものたち、全く荒野に生まれ落ちたまま、まるで魚の胎（はら）からでも生まれ落ちたままのようなものたちが、圧倒的強者に立ちむかうときの姿というものが、どんなに胸打つ姿であることか」

・「銭は一銭もいらん、そのかわり会社のえらか衆の上から順々に有機水銀ば呑んでもらおう、四十何人死んでもらおう、あと順々に生存患者になってもらおう（略）この国の『繁栄』を、この経済原理のみをまだ誇りうるものたちは、アラブの犯罪人たちのように、自らのなした罪のワナによって、ゆっくりと罰せられるときがくる。マリー・アントワネットのような優雅な死はもはやあたえられない」

闘争の日々

「逮捕されてもよかと思って、チッソや国と本気でぶつかりました。このまま死んでも構わんと。少しも恐ろしゅうはなかった」

「悪かことをしたという気は全然ありません。むしろ誇らしか気持ちでした」

「あれからいろんなことがあったでしょうが、みんな忘れがたい大切なこととして抱えとっとじゃなかでしょうか」

〈祈るべき天とおもえど天の病む〉

石牟礼道子資料保存会

２０１４年１２月、石牟礼さんの執筆を公私ともに支えた日本近代史家の渡辺京二さんの呼び掛けで発足。今年で１０年を迎える。眞宗寺（熊本市東区）に３０畳ほどの資料室が設けられ、有志が月２回集まって整理作業を続けている。

著作、所蔵書籍、取材ノート、原稿、やりとりした書簡、日記、写真など数万点を保管。分類整理作業や目録作成のほか、日記の刊行作業、命日の２月１０日前後に「不知火忌」を開催している。

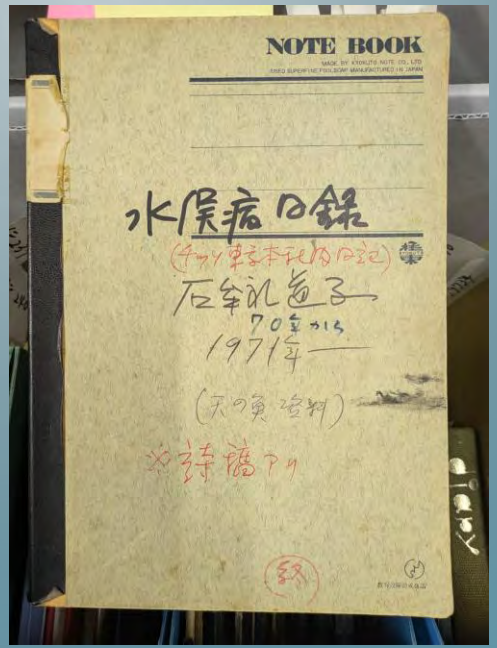
（発足式）

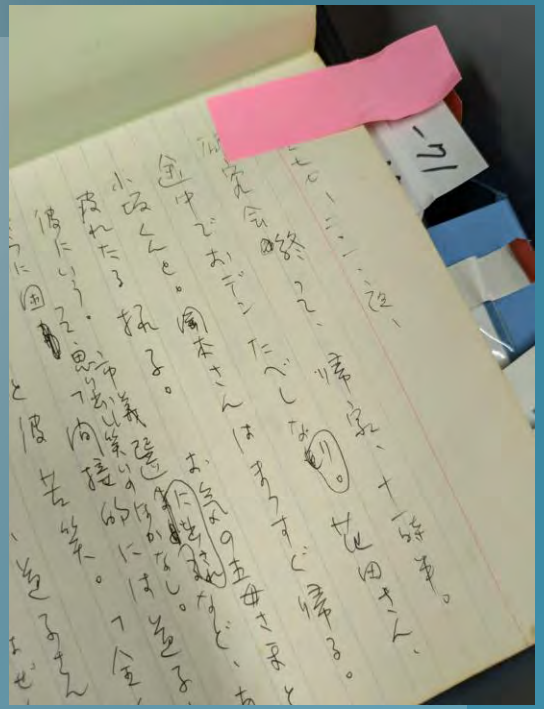
「日本近代文学において、石牟礼さんのような作品を書ける作家はいなかったし、今後も出現しないと思う。前近代の民衆の世界に近代的な表現を与えた作家の資料保存はとても重要な意味を持つ」（渡辺さん）

「こんなにたくさんお集まりいただき、申し訳ない思いでいっぱいです。いろんな資料を調べられれば調べられるほど、私のとんまなところが露呈するのではないかと思っております」（石牟礼さん）

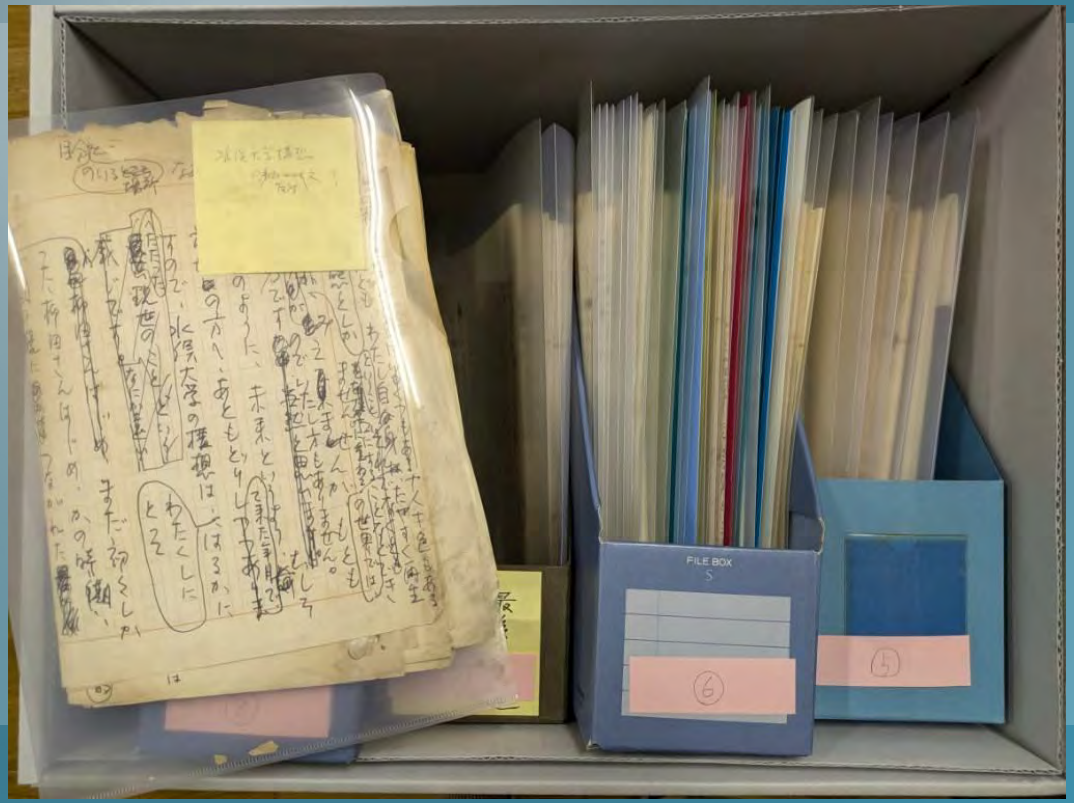
石牟礼さんの資料

FILE BOX
233~240
241~255
256~266
267~274


NOTE BOOK
水俣病日録
石牟礼道子
1971年



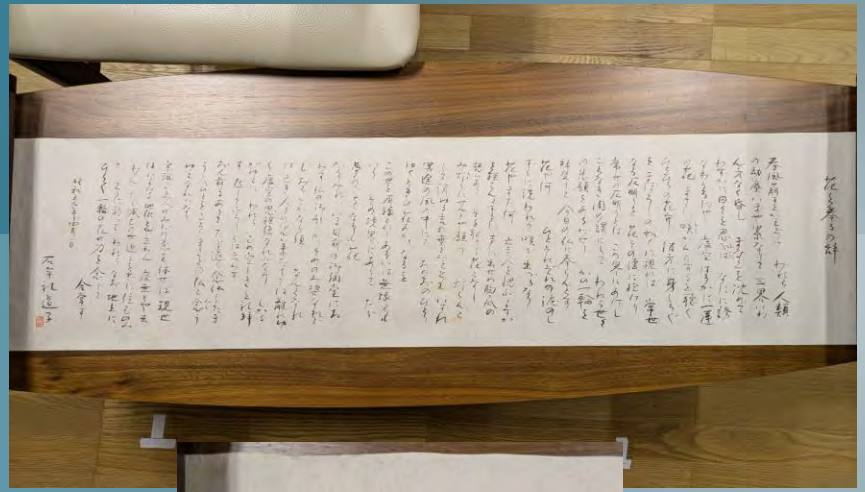
石牟礼さんの資料

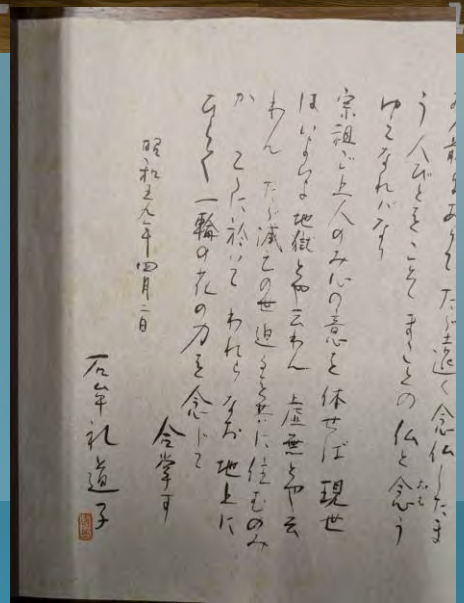


石牟礼さんの資料

花を奉るの辞

春風萠すといえども　われら人類
の劫塵いまや累なりて　三界わ
ん方なく昏し　まことを沈めて
わずかに曰くを忍べば　なにに誘
なわるにや　虚空はるかに一蓮
の花　まさに嘆かんとするを聴く
ひとりの花弁　彼方に身じろぐ
をまぼろしの如くに視れば　常世





う人びとをこそ　まことの仏と念う
ゆえなれば　なり
宗祖ご上人のみ心の意を体せば　現世
はいまだ地獄なりと云わん　虚無なりと
わん　たゞ滅亡の世迫るを思に住むのみ
か　こゝに於いて　われらなお地上に
ひとく一輪の花の力を念ずて
合掌す

昭和三十八年四月二日

石井礼道子

不知火忌　　命日２月１０日前後

- 熊本市東区の真宗寺
- 来年２月８日（土）

最後に

亡くなる前

「私を水俣と天草が見えるところへ連れて行ってください」

「水俣に帰りたい」

「苦海浄土はまだ終わっていません」

水俣を離れてからも死ぬまで石牟礼さんは水俣を思い続けた。